荻町歴史地区

歴史ある荻町の村は、山々に囲まれた狭くて長い谷を日本海に向かって北流する庄川東岸の、三日月型をした平坦な台地にあります。白川郷地域最大の集落であるこの村には 100 世帯以上が住んでおり、その多くが暮らす伝統的な茅葺き屋根の家屋は、合掌（礼拝時の手の形）造りで建てられています。この言葉は、急勾配の三角形の屋根の形が、お祈りをする時の両手を押し付けた形に似ていることを反映しています。

この種類の家は庄川峡独特のもので、江戸時代（1603～1867 年）中期にこの地域の環境、気候、および産業に対応して発達しました。屋根の傾斜は、毎年冬に白川郷を覆い尽くす激しい降雪で、雪が積み重なり家が傷むのを防ぎます。切妻造りの両側の壁には大きな窓があり、伝統的に主として蚕を育てるために使われた多層式の屋根裏部屋へ、日光や空気を取り入れています。

合掌造りの建物の歴史的な価値が認識され始めたのは、1970 年代のことでした。庄川流域の工業化や水力発電ダムの建設を懸念した当時の地元住民たちが、後世の人々のために家屋を保存する取り組みを始めたのです。荻町は 1976 年に伝統的建造物群保存地区に指定されました。1995 年には世界遺産にも指定され、その村の景観と伝統的な建築施工が「白川郷・五箇山の歴史集落 – 伝統的な合掌造りの家屋」指定の一部として、ユネスコの目録に加えられました。